

はじめに

無料塾とは、主に経済的な理由で一般的な塾に通えない子どもたちに対して、無料で勉強を教えるボランティア活動である。子ども食堂の勉強版といえればイメージしやすいだろうか。学習支援団体と呼ぶこともある。

本書は、無料塾の意義と限界と可能性を描く。

学校の授業についていけず、フォローも受けられず、自信を失っていた子どもたちが、善意の大人たちに丁寧に勉強を教えてもらい、「わかるようになった」「勉強の楽しさを知り初めて感じられた」「自分でもできるといふ手応えを感じた」などと目を輝かせる光景に出会える。

また、なんとか時間を捻出^{ねんしゅつ}して無料塾に参加しているボランティアスタッフたちの表

情もなぜかきらきらしている。

学生ボランティアもいれば、若手公務員も、子育てが一段落した母親も、定年退職した元会社員もいる。勉強を教えるだけでなく、夜食のおにぎりをむすんでくれるシニアボランティアもいる。

善意すらうかつに発揮できない世知辛い世の中だ。無料塾に来ることで、人間がもっている利他の本能が満たされるのであろう。

しかし一方で無料塾は、塾がなければ土俵に上がる、ことすらできない過酷な競争を強い、格差社会の落とし子でもある。

競争に負ければ、格差社会の下行きエレベーターに乗せられる。無料塾の子どもたちはかろうじて、尊厳をかけた戦いの土俵ににいる。

本人にはどうにもできない状況でもがいている目の前の子どもたちにはなんとか手を差し伸べたい。でもそうすることは、この過酷な格差社会の中で、救われる椅子を誰かから奪い取っているにすぎない。

本来であれば椅子を増やさなければならぬのに、むしろ圧倒的に椅子の数が足りない過酷な「椅子とりゲーム」に子どもたちを送り込み、全体としてさらに競争のレベルを底上げしてしまう面すらある。

無料塾のおかげで土俵には上がったのにチャンスをものにしなかった者たちが格差社会の底に沈んでいくのは自己責任だ、と割り切ってしまったていいのかという論点も生じる。

無料塾は、宿命的に矛盾をはらんだ存在なのである。

本書は三部構成になっている。

第一部は、東京都心近くにある、ある無料塾を舞台にした三編のノンフィクションシートショートだ。登場人物は実在し、エピソードもほぼ事実だ。生徒の目線、運営者の目線にシンクロしてもらいたい。

第二部は、さまざまな形態で運営される無料塾の、現場ルポルタージュである。個人が主宰する場合もあれば、大手NPOが多教室を展開する場合もあれば、行政が設置する場合もある。誰がどのような形で運営するかによって、無料塾の存在意義自体が変わるのが

わかるだろう。無料塾は、それだけ多様性に富んだ存在でもあるのだ。

第三部では、社会学や哲学の力を借りながら、いわゆる「教育格差」の問題に踏み込む。さらに、それを教育問題で終わらせないために、労働市場に詳しい組織開発コンサルタントの視座も借りる。

「おわりに」が本書の総括になっている。結論を早く知りたい読者はここから読み始めるのもおすすだ。

予告的に述べてしまえば、本書は結果的に、これまでの教育格差議論の死角を現場から指摘する役割も果たすことになる。

子どもの貧困、ヤングケアラー^{*1}、虐待、ネグレクト^{*2}、不登校、移民、難民、地域格差、自己責任論、メリトクラシー^{*3}、無理ゲー化^{*4}する受験システムなどのさまざまな社会課題が、無料塾には集約されている。

無料塾でいま何が起きているのかを知ることが、教育だけでなく、現代社会の多様な課題を知ることにつながる。教育に期待すべきこととすべきでないことの結節点に、まさに

無料塾があるともいえる。

さあ、無料塾という「パンドラの箱」の蓋ふたを開け、現実を直視しよう。

註

- * 1 ヤングケアラ―……家庭内で世話を担わされる子ども
- * 2 ネグレクト……育児放棄
- * 3 メリトクラシー……功績主義、業績主義、能力主義
- * 4 無理ゲー……自力ではクリアがほぼ不可能なゲーム